



国際理解セミナー

「作者の児童文学から見えるカナダの移民の歴史」

5月10日（日）、ジェフリーすずかにて、上記セミナーを開催しました。

まずは講師の先生の紹介から～



<Jacqueline Pearce> ジャクリーン・ピアース

カナダ・バンクーバー出身。
作家。主に、ティーンネイジャーを対象に、小説・短編を書いています。
特に Manga Touch (漫画タッチ) は、3年前に鈴鹿を訪れた際の経験を元に、
鈴鹿を舞台に書いています。

夫と14歳の娘さんと3人暮らし。ベジタリアン。
俳句が大好きで、時々自分でも作っています。
ブログに掲載しています。

Wild ink <http://wildink.wordpress.com/>

Website www.jacquelinepearce.ca

《セミナーについて》

カナダといえば、多文化国家です。在住外国人が一万を超える鈴鹿市にとっても、国全体で多文化主義政策をとっているカナダのお話は興味深いものがあるだろうと思い、今回移民についてのお話をさせて頂きました。内容は抜粋ですが、以下のとおりです。

カナダの移民の歴史

カナダでは、カナダ人になるのに、自分達の元々持つ文化を手放す必要はありません。

多文化主義というのは、全ての住民が平等であり、また自分達自身のオリジナルな文化と個性を持つ権利があると考えられています。

しかし、これまで常にそうだった訳ではありません。

先住民族（ヨーロッパ人がカナダにやってくる前から暮らしていた人々）は良い待遇を受けることはできませんでした。19世紀と20世紀の最初には、イギリスと西ヨーロッパ起源の人が大部分でした。その頃、カナダ政府は海外からの移民に多くの制限を加えました。中国やインド、東や南ヨーロッパからカナダへの入国は以前より難しくなり拒否された人々もいました。彼らはヘッドタックスといわれる巨額の入国費用を支払う必要がありました。カナダに入植した後も、差別と偏見に直面する移民たちもいました。



Jacqueie さんの住む街 バンクーバー

私の文学作品からの例

最初の小説 リユニオン(再会)の調査をしていた時、偏見が起こらなかつたパルディという町(私の育つた町の近くです)のことを知りました。

パルディではイギリス、インド、日本からの移民を含む多くの異なつた国出身の人が一緒に暮らし働いています。子供たちは同じ学校に通い友達になっています。日本出身の人たちは仏教のお寺を建てて日本の祝日を祝い、子供達に日本語を教えます。インド出身の人たちはシーク教のお寺でインド共通のお祝い事を行っています。そして全てのイベントに互いの人たちが招かれています。



Jacquie さんの一人娘の小さい頃(左写真の左)と現在(右写真の左)

一方、第二次世界大戦中、カナダ政府は日系カナダ人に故郷を離れ、カナダの西海岸にあった強制収容キャンプに収容しました(アメリカでも同様のことが起こりました)。日系人は、スパイではないかと疑われたのです。日系人の家族は家と仕事を失いました。パルディにいる日系人以外の人たちは友人を失いました。私はパルディの人たちの話とこのカナダの悲しい歴史の一面を伝えるためにこの作品を書きました。でも物語の最後はハッピーエンドです。



出版イベントで本にサインをする Jacquie

戦争が終わつたあと多くの日系人たちはパルディとその近くの町に戻り多くの友達たちが再会しました。

1988年カナダ政府は日系カナダ人に収容について謝罪しました。補償金の支払が決定されました。この補償金の一部から日系カナダ人コミュニティーセンターと博物館が私の住んでいる近くの場所に設立されました(私の小説、日本を訪問し鈴鹿に滞在したカナダの少女の物語「マンガタッチ」の出版祝賀イベントもここで開催されました)。

現在の移民

1960年代、カナダは移民政策を変更しすべての人種、宗教、国民に門戸を開放しました(現在カナダへの移民は教育、技能、健康やその他の特性に眼をむけるポイント制で許可されます)。

過去にはカナダへの大部分の移民は英国とヨーロッパからきていましたが、現在は大部分のカナダ移民はアジアとヨーロッパ以外の国から来ています。現在カナダの住民は移民かその子孫がほとんどです。毎年20万人以上の移民が一年間にやってきます。カナダの公用語は英語とフランス語ですが、200以上の言語がカナダでは話されています。

異文化への私の興味

異文化に対する興味は子供のころから持ちはじめました。私自身の家族はイングランド、スコットランド、フランス、イタリアがルーツです。

私は過去の話、知らない場所、異なる文化に常に興味を持っていました。特に、私の故郷の先住民である沿海居住サリッシュ人の伝統と物語に興味がありました。沿海居住サリッシュ人は過去だけでなく現在でも異なつた習慣と伝統を持つことを知つた時



Jacquie さんのおじいちゃんやおばあちゃんがカナダに来る前の写真
左は通訳ボランティアの高尾 千暁さん

には、驚きました（テレビで出てくるインディアンのようなテントに住んで動物の毛皮の服を着ていたのではなく、杉の木の家に住んで、杉の木の皮を柔らかくした服を着ていました。）。私の生活と異なった暮らしをしていた人たちの話を本で読んだことで、異なったものや人たちへの共感や異なったものを受け入れる助けになりました。

大学に私が通っていた際、コーチャンバレー インターカルチャー&移民援助ソサエティで夏の間仕事をしていました。このソサエティは私の育った小さな町にもあり、新しくやってきた移民がカナダでの暮らしに慣れるのに役立ってきました。奉仕の例を挙げますと・・・



Jacquieの本6冊(左)と右に展示しているのは、カナダの移民のための新聞・雑誌等

- ・女性のための支援グループ（女性が孤独を感じながらひとりで家にいる間、男性はしばしば仕事でカナダの習慣や英語にさらされるので、より速くカナダでの生活に適応します。支援グループは、他の女性と英語で話したり、買い物をしたり、カナダ料理の調理法、その他の技術を学ぶことができる場所を提供します。
- ・新しい移民の人と彼らを助けることができる地元の人を合わせます。
- ・子供のためのサマーキャンプ（他の文化の子供と地元の子ども同士が会って、異なった文化や伝統について学ぶ。）
- ・自治体イベント（異なる伝統や食べ物を披露する）

この活動を通し、わたしはお互い人々が語り合い、それぞれの見方から物事を見ることができていれば、問題を乗り越え、似通った点を実感し合えろと考えました。私は他の人々にも、このように考えてもらえたらと方法を考えてきました。

1985年の国際青少年の行事として、カナダ中の若い人々の文章や物語を集めて、一冊の本にしました。これは、この本を読むことで異なった文化・経済・社会背景を持つ若者たちが、お互いのことを知りあって、共感を持つことができることを期待してのことです。

私の作品と多文化主義の現在

私は、児童文学の小説を書き始めるころには多文化の町バンクーバーに住み、私の姉妹も他の文化の人と結婚し私の娘の友人もいろいろな文化から来た人たちです。

私の娘も多文化の世界に育っていたため、自然と私の小説にも色んな文化の子供が登場人物として出てきます。「ネズミと犬についての真実」という私の作品に登場する主人公は典型的な現代カナダの少年です。彼の家族は中国とイギリス出身で、彼の家族の中では、両方の文化が生活の一部となっています。

私の小説「マンガタッチ」はカナダの読者に、日本とカナダとの類似点と異なった点を紹介する本です。学校の先生たちが教室で私の作品を扱う時は、生徒たちが自分の文化的な体験を話し、お互いについて学ぶ手助けとします。



多国籍な仲間達

最後に

カナダには新しく来た人がカナダに早く慣れるよう助ける組織がたくさんあります。カナダでの就職を探すためのスキル習得を助け、英語のスキルを助ける人も、異なる言語の新聞、ラジオ、テレビ番組を提供する人もいます。小さな子供のいる若い母親の手助けをする人もいます。カナダは新しく来る人を歓迎し、社会のすべての人に平等に機会を提供できる国になってきました。

私は作家として、また読者として、文学作品には、共感を呼び、架け橋を作り、多様な生活を祝福する力があると信じます。作品を作ることで私も、他の人々や、他の文化を学ぶ助けになりました。このことが、今回私が日本に来るきっかけとなりました。

本日の私のお話が、皆様とカナダについての何かを共有できるものであればと願います。

ブレイクタイム



カナダでは、ティータイムには、イングリッシュティーを飲みながら、メープルクッキーを食べるそうです。名古屋で同じものが手に入りましたので、買ってきました！かえでの樹液のシロップが入っているそうです。会場のみなさんにもほんの少しずつご賞味いただきました。紅茶は、ダーズリンとオレンジペコを用意しました。

← かえでの形と模様のメープルクッキー
見えるかな？

質問コーナー

たくさんの方から質問の手が挙がりました。

Q.1: 「鈴鹿は外国人が多いですが、国の施策が追いついていないと思います。

カナダでの多文化共生は具体的にどんなことをしていますか？」

A.: 「料理講座などをやっています。(本を見せながら) これはインド料理です。これは日本料理、そして、これはカナダの典型的な料理です。」

Q.2: 「鈴鹿を舞台に小説を書かれたということですが、何故鈴鹿だったのですか？」

A.: 「学生時代からの友人のアントニオ（鈴鹿国際大学の先生）や友人が居たからです。」

Q.3: 「今日は“母の日”ですが、カナダでも母の日はありますか？日にちは同じですか？」

A.: 「はい、カナダでも今日は“母の日”です。時差があるので明日ですね。母の日なのに、私は日本に居て、顔を見せて上げられないのは、母に申し訳なく思います。」

Q.4: 「私は昔、ケベックに行ったのですが、フランス語の看板を沢山目にしました。

カナダでは、フランス語圏の人達と、英語圏の人達の関係はどうですか？」

A.: 「現在は特に問題はありません。ケベックはフランス語を話す人が多い地域ですが、バンクーバーはどちらかと言うとアジア圏が多いと思います。看板も色々あります。」

Q.5: 「今でも日本の“祭り”のようなものはありますか？」

A.: 「夏のお祭りのようなものはあります。」

Q.6: 「日系の現在の子供達は、日本語を話せますか？」

「カナダで生まれた子供達は、あまり話せないと思います。聞くことはできます。

一度そんな子供が日本に来た時に、顔は日本人なのに話せないで周りからおかしな目で見られた、ということがありました (笑)」

以上、本当にたくさんの質問がされ、ティータイムも和やかなものになりました。
驚いたのは、多くの方が英語で質問をされたことです。
多文化共生に対するカナダの取り組みは、正に鈴鹿国際交流協会が取り組んでいることと同じです。
国際料理講座、国際理解セミナー、日本語教室、外国語講座、共生推進イベントの企画・運営 etc. . . .
カナダの例に遅れを取らぬよう、各ボランティア組織も充実していくことを願っています。



30名の聴講生のみなさま、ありがとうございました。
また、お逢いしましょう (^ 0 ^) /



Jacquieさんと通訳ボランティアの高尾さんとSIFAスタッフです

Chico